



古今圖書集成
全



~ 5
1916



5
観
巻

Red seal impression at the top of the left page.

Handwritten text in cursive Japanese calligraphy (sōsho) on the left page. The text is arranged in vertical columns, reading from right to left. The characters are fluid and connected, typical of the cursive style.

Red seal impression at the bottom of the left page.

Red seal impression on the right page.

三つらとて... 宮傳... 所を指し... 子... あり... あり... あり...

子... あり...

三つらとて... 句集

春之部

歳旦

えらや... 樹の... 人... 一... 年... 闕...

あ... 風... 傳... 依... 思... 恩...

み... 水... や... 玉... 川... 結... の... か...

云... 難... 羽... つ... て... 美... 語... 々... 々... 云... 々... 云... 々... 云... 々... 云... 々...

松島 松島 松島 松島 松島
松島 松島 松島 松島 松島

松島 松島 松島 松島 松島

松島 松島 松島 松島 松島

松島

松島 松島 松島 松島 松島

松島 松島 松島 松島 松島

松島 松島 松島 松島 松島

松島 松島 松島 松島 松島

松島 松島 松島 松島 松島

松島 松島 松島 松島 松島

松島 松島 松島 松島 松島

松島 松島 松島 松島 松島

松島

松島 松島 松島 松島 松島

松島 松島 松島 松島 松島

松島 松島 松島 松島 松島

松島 松島 松島 松島 松島

松島 松島 松島 松島 松島

陽春堂家嗣佐々神の昔も
昔かゝぬを後

云々つとつと世の昔書

陶水瓶
は新年の旦

りの白く小瓶小撒酒花

痛中

梅柳よりまの服た

新花のこころ 程井と入

そのは

えぬのねもか

為餅のこころい

朝の向ふ摘み

晴

七行

新愛新の初場

粥

しら雁ももつちの暮の夜

高師の花草なつてさかす

いよりの花物な枝のさかす

さかすのさかすのさかす

澤さかすのさかすのさかす

おろしをいづれかきとせむ

これに位流のさかすのさかす

さかすのさかすのさかす

六言れ且もさかすのさかす

御舟岬のさかすのさかす

か

田小のさかすのさかす

さかすのさかすのさかす

さかすのさかすのさかす

かすのさかすのさかす

さかすのさかすのさかす

さかすのさかすのさかす

さかすのさかすのさかす

さかすのさかすのさかす

さうりふたふくく遠くも時を度

梅

梅をりか舟にぬる多分替の酒が
るれ子の家よりさか梅をり

遊台獄

梅をりか舟にぬる多分替の酒が
るれ子の家よりさか梅をり
梅をりか舟にぬる多分替の酒が
るれ子の家よりさか梅をり

さうりふたふくく遠くも時を度

梅をりか舟にぬる多分替の酒が
るれ子の家よりさか梅をり

梅をりか舟にぬる多分替の酒が
るれ子の家よりさか梅をり

閏月ゆき年

梅をりか舟にぬる多分替の酒が
るれ子の家よりさか梅をり

しるしをいふはあはれ地

はあはれ地はあはれ地

のあはれ地はあはれ地

あはれ地はあはれ地

あはれ地はあはれ地

あはれ地はあはれ地

あはれ地はあはれ地

あはれ地はあはれ地

あはれ地はあはれ地

あはれ地はあはれ地

あはれ地はあはれ地

柳

柳風を吹かすはあはれ地

あはれ地はあはれ地

あはれ地はあはれ地

あはれ地はあはれ地

あはれ地はあはれ地

あはれ地はあはれ地

嘗て此の山にふくむ神宮に
水浴とて嘗て此の山に
橋よりこの山をえりし書のお口
かきよひの山をえりし山への入
りし山を胸をえりし山を南
きよひの山をえりし山を南
橋の山をえりし山を南
神の山をえりし山を南

標

知標とておりの山への入
りし山を胸をえりし山を南
きよひの山をえりし山を南
橋の山をえりし山を南
神の山をえりし山を南

標の意

標の意はなる年紙のよき
水子守の標をかりしなる人

此の心跡をみるゆへに梅の香
を思ふもなほなほと梅の香

蛙

海軍とていふは蛙とておれ
眼や且ら出ぬるをさうた
初種よりみちの夜声く
流石に 葦ふりき種ふ
起ふに床の草をよめぬ
おらふと蛙とていふは

泥をさすは海目くは判具
われをふ物ありのさうり

蜂 託

あそびのつとみは蜂のさうた
蜂の巣も入たのさうた
馬を駈たふは蜂のさうた
おらふとていふは蜂のさうた

五ヶの書

あそびのつとみは蜂のさうた

まきの首

初木の清つら鞠とこく
物つれり鞠とけつとまき
花とらつらつとほつとまき

まきのそとまきそとまき
酒造

酒造

藤とくに鞠とけつとまき
まきのそとまきそとまき

まきの首

まきのそとまきそとまき

まきのそとまきそとまき

まきのそとまきそとまき

まきの首

まきのそとまきそとまき

まきのそとまきそとまき

まきのそとまきそとまき

まきのそとまきそとまき

まきの首

まきのそとまきそとまき

まきのそとまきそとまき

二日茶の心づき

母の白紙の紙に

陽の糸地

天真禪刹

かき紙の心づき

うけらるゝ一紙

陽の心づき

糸の心づき

心づきの心づき

心づきの心づき

紙の心づき

糸の心づき

糸の心づき

糸の心づき

糸の心づき

糸の心づき

初午

糸の心づき

初午也。飯初也。七と云
之。阿平也。飯初也。柳也
初午也。小籠と飯と舟上り

病後

初午也。梅也。年々梅と云ふ
と。午に梅後。梅也。世に云ふ

涅槃會

多事なり。つゝも佛のつらねも
初とん。念中。任事の内を。世に云ふ

西行忌

後子記書。子也。長閑。厨と
笑。つゝも。上。人。云。つゝも。
た。飯。つゝも。名。云。つゝも。

花子。死。ん。初。ん。欲。の。か。み。り。初
み。つゝも。生。れ。つゝも。花。の。後

出代 藪入

出代。つゝも。初。つゝも。位。つゝも。り
や。梅。の。小。籠。と。舟。上。り

出かゝるゝ一ふせきし秋味を
鏡清の松竹の影をみる遠き舟

草

中しふふき夜をらふよ草の草

菊よははら

喜とてし時よの影をほらひされ
未星柳の影はともあき草竹
りや我さしきかゝるの續在

草の草 くらゐら

病後の吟

跡をいれやい進り小草のこゝろ
かゝるの草の影をみるよ
草のこゝろ白ひをみる若き

茶の店

掃きよみ膳のむらひの草の草
草のこゝろまの地影をみる
井のこゝろやくら掃く寺の

焼野

鳥の音も居るからして枝の雛
唐紙の裏にひらひらと
まかすてお花散らす網の雛
羽もあつて唄の橋もあつて
山里や馬槽ふ雛のあつて
鷹も川まのりもあつて雛
帰る
鳥の居る所を
我らもあつて居る雛
長い路の
鳥の居る所

雲雀

明星やとあつて
川やひらひらと
新垣や花散らす雛
地物もあつて居る雛

燕

新垣やとあつて
人住もあつて居る雛

何の帆の帆根。くさくさしたるは
葉遊り下の方を拂ふ夜は
ほろろ寝る宿や日さすふさふさ履
葉遊り靴中ふさふさ履
くさくさ

くさくさの帆根。くさくさしたるは
葉遊り下の方を拂ふ夜は
ほろろ寝る宿や日さすふさふさ履
葉遊り靴中ふさふさ履
くさくさ

あつたこころのきぬらぬのきぬ
かほををさし入さし
あつたこころのきぬらぬのきぬ
かほををさし入さし

あつたこころのきぬらぬのきぬ
かほををさし入さし
あつたこころのきぬらぬのきぬ
かほををさし入さし

あつたこころのきぬらぬのきぬ
かほををさし入さし
あつたこころのきぬらぬのきぬ
かほををさし入さし

あつたこころのきぬらぬのきぬ
かほををさし入さし
あつたこころのきぬらぬのきぬ
かほををさし入さし

とくまうりまを喰ふて桃様ちりり
舟の船はるか折るさうに送さる

桃

家ありと桃の中へも踏入れぬ
里の桃庵をきかちりあつた
くらもむき本を割きまじりか
崖の柳かよひても竹をくらひぬ
噴かやとちりも柳のさか
かきとるや堤よりさきさきお花

伊予

まきにははく入のあまの曲りし
あまのくろ小舟をちりり伊予
濱あけの牛をさかちり伊予
あまのくろ舟の形も伊予

あまの舟の伊予里に笑し
今やあまの形り

之や

あまの舟をちりり伊予
あまの舟をちりり伊予
馬の事ふまをちりり伊予

花 様

花くさうらん様と海つりを言ふ
降つきを画ふかく花の森集り
人走し竹もよみ様を様とす
此はさきさうらうあつて一本が

洛うさう

寺くさう通りぬけさうさう
をこらさう様と様と花う形
親小海いつこら様と家さう

ゆりさうさうさうさうさう

夕風やけ本のおさう散やさき

花一河と場とゆき

さうさうやさきのお花のたき
ちさうさう風子さうさう
河の神家様とさうさう
川内の磯山様とさうさう

信長屋の神社

神さうに権様もさうさう

丘岨のほとり一たふらふと嚴く南
今もこゝに暮れわたるや出たつと

藤

藤さくや歌の^{イヌカ}世の末のま
物に後^{イヌカ}こゝろあるを
有るはや人^{イヌカ}まじり人^{イヌカ}家^{イヌカ}人^{イヌカ}寮
月^{イヌカ}幽^{イヌカ}し^{イヌカ}な^{イヌカ}る^{イヌカ}と^{イヌカ}え^{イヌカ}そ^{イヌカ}夜^{イヌカ}の^{イヌカ}夜^{イヌカ}
去^{イヌカ}る^{イヌカ}藤^{イヌカ}や^{イヌカ}月^{イヌカ}ほ^{イヌカ}の^{イヌカ}つ^{イヌカ}を^{イヌカ}山^{イヌカ}の^{イヌカ}境^{イヌカ}
花^{イヌカ}の^{イヌカ}く^{イヌカ}ふ^{イヌカ}り^{イヌカ}花^{イヌカ}の^{イヌカ}藤^{イヌカ}の^{イヌカ}た^{イヌカ}は^{イヌカ}に

藤の歌

而れ藤のたけはいつり藤のたけ南
新やえる水の心藤のたけ南

藤の歌

しよと都のたけをこゝろのたけ
葉^{イヌカ}様^{イヌカ}の^{イヌカ}山^{イヌカ}の^{イヌカ}ま^{イヌカ}ま^{イヌカ}の^{イヌカ}ま^{イヌカ}
羽^{イヌカ}の^{イヌカ}く^{イヌカ}ふ^{イヌカ}り^{イヌカ}花^{イヌカ}の^{イヌカ}藤^{イヌカ}の^{イヌカ}た^{イヌカ}は^{イヌカ}に

正下子命歌

先由くも降る。我もよも入
餅酒小燭。くまの地つて
其しやまの白魚。いこり菜
亦も海の子。智所くも水鏡
まの水岸。野の情も。つら
風一吹。海より。あな。松のこ
杉の花。柳のこ。も。さ。は。は
庭中ふ。あ。る。角。こ。橋。種。は
古。さ。代。り。み。ら。く。紙。や。か。こ。か。こ

圓光の御書

去る夜。智恩院の。情。か。ま。し。し
燭。ち。た。ち。や。も。如。月。は。基。所
厚。山。屋。の。あ。ら。う。な。ら。ぬ。別。れ
善。市。小。治。り。を。と。或。の。も
而。主。禮。院。中。降。入。は。ま
り。し。し。く。の。あ。ら。う
く。の。あ。ら。う。く。の。あ。ら。う。く。の。あ。ら。う
く。の。あ。ら。う。く。の。あ。ら。う。く。の。あ。ら。う

仰の尊き心勝るは子
あやしく

おのこ出てこゝ木の五か木橋
削の味味さふくめさむ
まは月山椒の皮ふむせえり
新ぬや新ぬえり唐橋
多重に入ると知る法こそ

春詠都三百二十句

碩布著

白雉句集

夏之部

更衣

元白代田服をりまゐり
る哉始つてさう志久ぬ
わら屋中地帯よとあり
二條も之は屏のほつ建
かきまや胸き合人さ
なまのぬき着のきま
給ふそ知の花折ん心

馬よりりゆふ人かゝるに流るる

楚川のさかきぬめさし

新し給ふはゆり新し給

給ふくくくくくくくく

伊勢のるるるるるる

ふふふふふふふふふふ

善心原

ふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふ

灌佛

中よあひもあひりたり佛生

一聯二言

而父より名を授け給はる

即母のりんをくくくく

灌佛も若葉園をえ透し

夏心原

夏ふこもはらとて廉一を
後任の書すすむる夏
何れくまのふをさるる

短夜

みーおや 奥庭の上り
のやとれおを後 思のふが

夏の月

このふもは 桂の月
くらふを流し 流する月
田中をさるる 流する月

鄭公

起ふよのふのおまらぬに
弓有と号持をさるる
夜の灯もこも位に 鄭公
ふれはれ 露降の中しに
子視啼らぬのり海
舖の灯を流すのちり時
鳴る月は子もさるる

印もいさよの復や保ちあはれ
黒崎のせしむるものなり

弟鹿子松御極一以

おやまをまねた松屋の杜を

雄秋晴まを

鄙より加ねまを山蜀魂

あまの湯泉

五所やと川舟の村檣を

新より庫裏の窓より子規

馬子熟ふハ誰かおははるま

西浦海曇寺

江を掃ふ似合の山を

因津やかけ時を厚木川

謝尚をさしめて告人の子規

啼くも思ふ空八咫部

鹿の子

八九皆鹿の子は夏に林を

早のふもあはれまを鹿の子の顔

草の原何を床の子をけしめり

松魚

舟とを舟をりし初うそ

夜うたわぬ裾めしきる田井が

三桃めしを携りし雨ふ

先人の志を待たし体は

あふりあそせしむしあはけ

せしきもももあのをいし

江戸子銭と志形のふけり井

亭をりしあそせしむしあはけ

吹くそえしむしあはけ

雨古鳥

たけけの啼ふし川の山りんこ

深長を世と山魁も啼り以

白樫をよよとくもかんこ

志つるしれ啼もそかた深長

深こも啼り林より落る相

牡丹

暁をりし夜を静なる牡丹が

散りまわ牡丹のめしり物置

牡丹花老人の賛

牡丹神より連奇成るる花

燕子花

ちりりかきこころのさか

る花はけしきを葉伸の牡若

雨より多らりしわがさか

芍薬

着花や日十八のあはれ

答なき芍薬と云ふ

芍薬

人より京より遊くを送る

世と云ふ葉を花のころ

己のうらみと云ふ柳のつら

玉のうらみと云ふ花のうら

若葉と云ふ花のうら

本とのうらみと云ふ花のうら

知の花

竹騰りし卯のぼかふふのこゝろ
卯のされし色をえこゝろ夜の海
柳とつくりぬれを打る部を
卯のさや打るの後のこゝろ

青風

かゝら山身あのゆきもあらん

馬門亭

人のあつ昔我中村のまゝ
砂川や楮をあらぬまゝあり

山のぼくや天籟拾ふまゝあり

嬰田西米

花をいふらんてなはれ雀の
苺子のをれえとけりちちち
花けいやくぬきぬき階子葉
きしきとすらしらり敷好り

竹の子りん

竹の子れ落のゆをかきり
こゝ竹も牛のゆかぬ風ふく

甲斐及志摩のふさうしきさうじ

白櫻や若井京とついで

紫湯の花

ゆらさぬやうな花は

此のゆきりすの髪は

手解所の墓

あらしあのかうり果は

水牛

あらしと水牛は

實相無海は大海より五

六慾の風をふくみ

生如り波のなみ

薄の風をふくみ

東船り列層は

くまのや河の根

橋

老とて花は

多らさるまか

こつね

母の五十回を満ちるもあまふ
みよきとて身はたかきぬを
くは乳をたかきぬを
も敬まふをくは
をくはたかきぬを
はたかきぬを

五月雨

仮そめりて
あのみちを
たかきぬを

空のりて

あまふ
たかきぬを

あまふ
たかきぬを

入梅

あまふ

入梅の頃遠かきを厩に邪
入梅のむす鼻とさきと標を

端半

やまを立候しぬるに居るに

殿侍よりたりしをあらふ

あやめの子をいけしめぬ宮中

つらをあしなまのいよ

微らもかりあまきと佳きなり

ホウセをふりぬるに荆鹿信事

なつれと教まて

かしの 古人のあやめ神ふせ

新向やらん市小牛かか思のあり

後寓子さぬ草花の童る

家なるうねふさつ

程やのちありしを深山の

梅もあま時あつし

源うらふさよの夜の子白

叶のや粒をけく夜の

長し物まけさうあやえ

庵の伝事すなはち

小萬庵ふさ疑の秋家なる

こゝの海は萬葉集の歌あり
世をよみての海あり

藤水堂より祝の海よみ
こゝからゆきしけきをもよほす

以て海を胡海と云はるる酒

世をよみしけきをもよほす
むつしきしけきをもよほす

競馬

競馬ははるおもしろき事なり

むつしきしけきをもよほす

火車

おもしろき事なり
遠くをゆく事なり

こゝの海は萬葉集の歌あり

火車振と桶をよみしけきをもよほす

桶の男より船の綱とよみしけきをもよほす

命をよみしけきをもよほす
綱をよみしけきをもよほす

田植
伊勢を

伊田より志の海に泡ふく世風は
松苗や田中村をへりては
志の山に松形をふくつては
早乙女の墓に柳を植へり
早乙女のくちけりては
木のりも松葉に似る田植
早乙女は着葉ふとの山田を
まき田

金一しんふれり出〜田が

蛸幅

早乙女のくちけりては
蛸牛

松苗や田中村をへりては
志の山に松形をふくつては
早乙女の墓に柳を植へり
早乙女のくちけりては

蛸

松苗や田中村をへりては
志の山に松形をふくつては
早乙女の墓に柳を植へり
早乙女のくちけりては

まを夜と供くことおれおん

蟬

松の木やまを乾く蟬の啼
夕顔の花も清きをいかに
帽の心くくも おまのむ乾き

蚊

蚊をり火のらやのまほふは蚊を
竹叩く蚊の居る遠き地をたふる
こもくくこもき物を帰る月
蚊のさす蚊大粒梅子指の股

蚊小酒を吸んおます 蟬の月

花の川橋小僕も新緑の柳に

下京や蚊やまをき 藍の蓋

まをくくまをいれ入り

蚊尾の月こ子がせし位かゝる

夏の虫

虫小蚊さくさくまをいれ

水鶏

節あをけくまを乾めたり録入し
をらこくまのまをぬおをいれ乾き

粉

粉の味も魚もさくまぬる
粉の粉も粉も通ひつゝ目も

かかせみ

遊舟より筑波お流しふ吹さ
中絶し橋を遊舟の山橋に

氷室

せの貝まらぬ中し氷の貝
雪の中し菊より水舟の貝

蘭新野といふも遠きたあは

新しき舟もつらやな少

雲の峰

舟の底えきさなはれし
雪の峰といふも遠きたあは

川橋

川橋も橋の橋もすゝる
川もやその舟も月日分

細涼

巾着の主人は金銀の下原
まじりて山崎の向かう白鶴
梳ねるもつらき山崎の
すし江の鱈をくわすの
蜀黍のそとをかきまは
志き波や杖一節の海より
舟ゆくまじりて富原市街より
さくさくさくさく
さくさくさくさく
さくさくさくさく

船より養分樹少本や又存る

葦

葦酒を母と事を持たり
ゆくまじりて山崎の

船

斤子徳馬上り船にて
明るなき後若船に夜も

葦風

風は月を夜もさす

虫予

虫予も庵より久しき松をり

暑

の孔前の浮き思ふに落りけ

なれば暑く一筆すの魚ふと云ふ

悼念石

は界と思ふしこの服う也

麻

麻州より麻きぬあはれはこ

夕立

夕立もや流るるはむれも

風をひくく大立候も世中へ

清水

博のすむ粒さくも

仰る遺言ふな人の心を

滞るるすの福正蓮社より

一丁一は流りてはさるるを

能くわゆる法衣の捲き

何れも一木ありて磯居水

祭

見あふくおろきもあつて
木と竹と糸の流る由実心

夕景

夕光も小阿多し
あつた花のうらみ
夕光も花のうらみ
あつた花のうらみ
あつた花のうらみ

昼の海

空のうらみ
あつた花のうらみ
あつた花のうらみ

蓮

あつた花のうらみ
あつた花のうらみ
あつた花のうらみ

丘

あつた花のうらみ
あつた花のうらみ

此のあし板ハナヒル響く月夜を
祖師堂より山の上より響く

佛後

たゞ後門の扉も佛後の
海川も佛後の水も佛後の声

かたより七条の宮り

ゆり

川を流るるも佛後の
舞うるも佛後の流るるも佛後の川

不台題草

さきしきも雨越る跡や
訪ふ人も薄の宿ふかき
蟻のより約種もみくつ
山石もや嵐の向う

慈路語

菟冬もむらさきも
濱木もむらさきも
西日も人濱も

おもしろくはなれた遠き花標
梅熟すおよあけし日暮に
葉柳の寺所さぬあおる
山をぬり猿人骨といふ
花袖のみさくらさくら
あやまらぬ早瀬あまふ
下宿や梅のさくらさくら
桐葉の聲
桐の花並羽衣の扇を
かき揚ぐ

山さくら二玉人境子三玉の
越飛と舞いさくらさくら
盤桓と上毛の流
志願の山と眺む
至景にさくらさくら
かき揚ぐ
合歌のこしらへ
大樹公舟舟さくら
さくらさくら
鶯一羽さくらさくら

子破るく

松風や舞をさむく小羽後を
舞うよ形形面々なる 田舎
一志きりし竹も柳も 玉やしく
まきまき ち花の病も あどく
竹もきりや木竹の 山本想は
沙鷗の 舟も 舟も 舟も
故香も 舟も 舟も 舟も
木鹿も 舟も 舟も 舟も
船も 舟も 舟も 舟も

色こころのまきり 白やまきり

山を越し 船を乗る
若く有年を 舟を乗る
耳

五ふれまきり おいしきもの

船人の子 船を乗る
いひかきり 舟を乗る
船枝り 舟を乗る
我人 舟を乗る

冷 舟を乗る
舟を乗る 舟を乗る
舟を乗る 舟を乗る
舟を乗る 舟を乗る

夏詠都二百二十六句

去々雄句集

秋之部

立秋

梅牡丹萩のこころは
馬雲り小笠り秋のつら
初秋やに管仲丹之海
菊の木をこころ秋のこころ

のこころ秋のこころ小笠り
こころのこころのこころ
菊の木のこころ花のこころ

ほろけくも

川くさしヒコ薬り林のる川流
を月秋や流る先も 山
秋つるふり陰より萱ノ軒

病後

ほまなりやあきいつのゆ

桐一葉

山より入るの聲のありこころ
さうゆい入るの聲のありこころ
あつそまこいゆい

錦の声のあり桐の一葉あり

一葉に葉のちと相もいそぬけり

ほろけりあきの桐の一葉が

音すふり真の口より桐花と葉

うつせしの空しきかゝゆり

さしつららさあさるはを

ちくさむ桐の一葉子障の光

七夕

七夕や桂しそ八月夜
たかきや黄子月そて夜の用

をいふにまゝに
言ふにまゝに
言ふにまゝに

言ふにまゝに

言ふにまゝに

言ふにまゝに

言ふにまゝに

言ふにまゝに

言ふにまゝに

言ふにまゝに

言ふにまゝに

言ふにまゝに

言ふにまゝに

言ふにまゝに

言ふにまゝに

言ふにまゝに

言ふにまゝに

言ふにまゝに



ぬれりなむいにはれ

早れ東を終るも空なるは

露

海くまへあすむらみ枝り露

土移りあふこくはを件業に

あまの国

空かへりていふ言ふ侍り厚

船あも河もあはれいむは

泊りやあつたあはれは

むらさき小舟のいす出に

あまの国にいふ言ふ侍り

歌 樂山子送章露

あまの国にいふ言ふ侍り

稲妻

以てつもの衣を透る浅草に

あまの国にいふ言ふ侍り

稲妻やシラカバあまの国に

いふ言ふ侍り

此を法華のさき候し〜を擲る
稲妻あや〜はなせははな
いふつらひをいふは 魚イサのふ
稲妻あや 隣子〜 虚言病
いふ候や 何き 磯屋は 海ま
稲つらや いかさまと 何人
世をとうら 電光石火酒を
秋風

秋風 誰も通らぬ秋風

秋風は 草むら 城の 備え
吹かす のらふ 葉根 枝の 風
こもりは や 嵐の なるの 風
みちのく 行旅の 風
西足山

門は 入ま 僧を ぶら 秋の 風

初嵐

夜半 鳴る 砂利の なるの 初嵐
偏山 吹 垣と ぬき ぬき

靈祭

これ子なり是より山に下りて
身を洗ひて 鞍馬にのりて 盆に
魂をうつりて 冥途の情をほめて

後中二句

山うけやわねぬはうはり是を
養ふ也我魂迎ふ宿を是

左の山に魂をうつりて
その山に魂をうつりて

盆にうつりて 冥途の情をほめて
魂をうつりて 冥途の情をほめて
盆にうつりて 冥途の情をほめて

先白くも 盆にうつりて 冥途の情をほめて
盆にうつりて 冥途の情をほめて

先師品川の唐子も
昔にうつりて 冥途の情をほめて

かくちのきをよのえけしこ
おのいおぬ秋の師あり
新阿の二人をよのえけしこ
はたやそと吹風をよのえけしこ
結る去年の秋の結るありそ
こをよのえけしこ
平かかそ今も今も信徳のよ
小阿のそ人の田圃の早よ
そそはゆるおまの林をよ
そそありちまの蓮の葉を
あまのそ魂迎のそ

そと
あまのそ魂迎のそ

迎らそとつては安海の烟の
神や居よむのむ火のそ
むのむ父の母のそ
又むのむのむのそ

生身具

くそ物も話のそ
後魚の後へのそ蓮の飯

燈籠

燈籠のそ
燈籠のそ

朝うほ

あさうほよ権の落し内儀が
ちさうあや垣しあすれむら
葦舟小着すれ魚もえきうさな
あさう物り新鳥のともりき

木槿

花むらけ立りれそやき思ひあり
めくまの隅花淋しみ木槿ふ
木槿

あはれく丘の小家や花すれ
棧を前ひかく脚やさき
空くせや尾花うまおの枝子雲
一むられ尾草そり秋のあはれ

萩

七あおの飯花子作し以先り
あふし一棧むし一離れもの
風情を

萩垣り萩咲を以川りか
里さるし小萩のふ借ふはむ

きりあして一枝ごころの秋

芭蕉

秋もたれてあめなるる芭蕉が
とせぬさるや何をちかしく感味
やきんせぬこゝろはなほのこゝろ

葛

碓氷の葛も甲斐女かよふころりも遊
雨の屋後葛の小きく水こゆ
松の根の葛もふきをすの根子か
あつ〜葛もふ〜あつ〜入のあつ

福

同〜ぬく〜福もふ〜あつ〜御ま
福の〜ぬく〜福もふ〜あつ〜
以て川やのほろ〜あつ〜

福〜あつ〜の福もふ〜あつ〜
福風を〜あつ〜あつ〜

かけ福やほひあつ〜あつ〜

〜あつ〜あつ〜あつ〜あつ〜
〜あつ〜あつ〜あつ〜あつ〜

秋草不分歎

ゆふの中ふ野川流るる草花
蔓又中のほくつと秋草二十口立

對門人

こゝろをわすれし秋もさくはな路の畔
山ふた打野るる洞心さき高のち
きのふふふさきさきさきさきさき
あまのさきさきさきさきさきさき
立山と美奈の洞心さきさき

おれまのわすれもかきさきさきさき

古寺鳥籠埋地と云歎

おれまのわすれもかきさきさきさき
未枯や坪前裁もせさきさき

蟋蟀

こゝろをわすれし秋もさくはな路の畔
山ふた打野るる洞心さき高のち
きのふふふさきさきさきさきさき
あまのさきさきさきさきさきさき
立山と美奈の洞心さきさき

まじりくつて釋きぬ姫江の秋なる
の夜ぐよ芽をさるに蝶舞

病中

食ふんとして寝る宿せんかた

蟬

露井やうらみこゆる風なり

棟や一夜宿せし連糸屋に

虫のなきく 写すや宿の電

惆

年早中ころころと秋の身ふ川

首のふ朝も啼くはるまじく

蜻蛉

秋のまきの糸をいほりてさるぬ

蜻蛉ふゆり蔓草にたはる

秋の虫

虫の音や月いさつらふ書の小口

くさむしも其あも虫の宛方から

鹿乃や踏きんとせり虫の啼

春はさかすまを何く 洞壺

草菴の園

我細く花のけの虫をやとふ
このけの虫はとも 秋の夜半

あつらひぬきまのつれづれ
ありむ

おもむきももつに茶をい

八朔

八朔や旭の心流をたぐい潮

磨り出し出のまのむの田つ

陰りてさし世を八朔のり

八朔のすそ稲在竹ま

野合

は夜中も世をまはるる夢心

ありき 形をまはるるの夜

雪

雪のふるまじりして物の園の

雪馬の跡をまはるるの

音のまやね明極く山うら
人無し秋の聲に音とれ
秋うらや美なるうらうら
秋音や唯ふふ音なき山うら

秋雨

秋の音は雨の音なる事なり
菰の葉やうらうら秋の音
花葉やうらうら秋の音
自他共白骨

秋の音は雨の音なる事なり

風月さうらうら秋の音
夕子さうらうら秋の音
金中雨の音なる事なり
秋風うらうら秋の音
秋の音は雨の音なる事なり

秋の音は雨の音なる事なり
秋の音は雨の音なる事なり

晴る月夜は静かに占いで

待宵

去る宵はしづかに静かに待たせ

中橋より京橋の向ふ電燈の

待宵はいつきの橋を照らす

駒迎

西之り長水子よ駒を待つ

放生會

放生會は夜半の月を照らす

松より月照らすも放生會

良夜

晴夜は松を照らす月を待つ

名月台は美しき月を照らす

名月台は建つて静かに待たせ

名月台は夜半の月を照らす

娘は松を照らす月を待つ

乙女は静かに待たせ

あはれは静かに待たせ

あはれは静かに待たせ

夕日右岸の舟を渡る舟の事

雨塘の午明橋上

月影を映し出けの波をよほす
渡舟の舟の影をよほす江の月影

長傳禪師の流石の筆

世を八雲に換へて月影をよほす

洞窟の影をよほす浦の月

舟の影をよほす

月影をよほす舟の影をよほす

夏夜雨

舟の影をよほす舟の影をよほす

舟の影をよほす舟の影をよほす

舟の影をよほす舟の影をよほす

舟の影をよほす舟の影をよほす

舟の影をよほす舟の影をよほす

迷嶺

舟の影をよほす舟の影をよほす

舟の影をよほす舟の影をよほす

舟の影をよほす舟の影をよほす

名月台家元現今加ふ教法師
月こゝれなるを六井三三
陰法さたうなるこゝれを
訪ふ教人より對して

月半満り月半はせんこゝれが
名月お世の形お世の家
舟よりしるすもお世の
なまこゝれのお世の
秋夜お世の
お世の舟とお世の月

月照さん雨ふ傘をささ客来り
宇治山暁回航して
深川七切松まを

秋涼し月をささ松まを
良夜無雨涼

鈍しよのふし二夜の月を海に
月お教場へし約うはれを
重寶
名月お教場へし松まを

玉の御の任儀一也を道る
月姫終目由とれた影を祈るなり

自他都人の天竺絨の枕の
名に風流をまね ぬれ病の子
休くは夜床をさるる事
つらきにさるる出づるのみ

まじく枕小膝子せん月一夜

まなをさるるをむく我ら
かきく

おしげの衣流流の月よか

既望

るかの影さるる月の影をみん

くぬおやうきさるるに月おけ

雁

秋風も月もあふはる月お

そつるやうにさるる出まれ

くまひ子さるるの影をみん

いづれ

かゝるるはし福をさるるいふるは

あのを由りつるるお田の原

はまきさるるさるるなありき

そとれ一おを

片断 四阿 翠色をさるる

ふらふらと夜さす秋を月が照らす
番屋の西より風をくす月が照らす

礎

ふらふらと里をゆく山は静か
お撲えもゆか所も宿のまはり
くやね柳の林のまはり
遠きまはり門のまはり橋のまはり

後さか原

雪をよけの紙をぬき秋を
早稲酒

子稻酒よりぬき酒をよけ
くさ酒をよけ酒をよけ

冬酒

山畑や筑波の流るる酒
河の事を流るる酒をよけ
流るる酒をよけ山をよけ
ゆき酒をよけ酒をよけ
雪をよけ酒をよけ

酒

細の月やふま何つまを啼鶯

去佐光庵の画り

くはくはのふくまはこほはるニユケを

とくは我書以てををにん

鶯

深掩くゆまはくや鶯の春

菽子や鶯卵の舌を鶯の心

鶯

野うつくさの林火ののりお

野うつくさの林火ののりお

夕鶯の浅はるさる一羽さ

人待し鶯啼て我々たの

木の突

袖あまの羨ふこまをあし

浪移や菊川ぬき山馬

牛の子よ椎の突臨ツマなま

枝の移り鳥さあはるま

屋老啼浪移らあはるま

戸隠山より
松の葉のいろこも枝の葉

菌

茸物をこもむしひ穂のほこり
紅いけし山口のさき草の
お枝し毒の木のこころこ
切株や米のさき草の
なつりや楓草をさきあそ山
三味線子松の枝や菌物

秋の雨

物の音林を露のこころ
かきりれ何れかあそ山
露のこころをさきあそ山

秋の魚

山風や世を鱈小魚の
さたをさや尾まの鱈の
さたをさや尾まの鱈の
さたをさや尾まの鱈の

紅葉

浮きよのみらちの晴る屋上系
昔をこゝ紅雲に啼也山鳥
夕暮をば川をたるる

伏龜の腹痛を

秋を紅雲ふまふこゝ晴上る雲を

西焼ち

月よ入る紅雲かきぬ人ぞたれ

后の月

富士晴る山口ふ堂のちれ月

老ふりぬ人ぞ誰と后の月

塔の月宇陀のひらくもひく昔

台嶽の鯨音風翔と在る

降りぬ雲中の瘧疾いかにその

深きしきりえよき月之念録

江都のなつやかなるの輪

を憂ふりしを

を病むるもそよめのみは后の月

草花の晴る黄なるる所の
そのまののさきしおひくはれ
を病むるもそよめのみは后の月

牛の子は鹿をそそる月夜
閑りてえそ海船と月夜も啼
鹿のあそぶよわきまよそ長
けなすの秋のそそる舟風は
追々そそりつと啼を烟の集
絶へて流るりり月夜も

山家あまやうりて

鹿のあそぶよわきまよそ長

けなすの秋のそそる舟風は

追々そそりつと啼を烟の集

絶へて流るりり月夜も

花のそそる江部小庵をく山家
里の女も本履おろす小庵も啼

為末

僕ひびきりておろす風をのそそ

宿のそそるそそるそそるそそる

若く白く秋のそそる

菊のそそる花もそそるそそる

酒造る所り小菊のそそる和歌

白菊よ小り高屋のそそるそそり

黄子よ小り酒造る所り小菊

結さるる所り小菊そそるそそる

碎ふせむ何のまへん富の菊

はるの菊の老をこくまきくも

早の菊つらふ鐘のこのはる菊

菊持て思光をけふは菊

俗宗のまへにけ院のまへに

の菊もまへにけ院のまへに

中し思光のまへにけ院のまへに

噴や菊のまへにけ院のまへに

はる菊報け菊をよきま

菊のまへにけ院のまへに

台嶽

僧の依地とりの菊をひつ提

菊中

菊やさく我師をくまへ

菊のまへにけ院のまへに

梅原

梅原のまへにけ院のまへに

梅原のまへにけ院のまへに

梅原のまへにけ院のまへに

秋

秋のまへにけ院のまへに

秋のまへにけ院のまへに

秋のまへにけ院のまへに

野々海ふりし

波解るあまこし秋のそん

多しのけけ馬も通る秋のそ

けけもねくじい園のあはれ

不寺やま湯のあまこし

道しよやふふるる秋のそ

情きし秋のそ

傳あまこし秋のそ

小葉一抱せ秋のそ

行秋

り秋のそ

ゆく秋のそ

行秋のそ

ひまのあまこし秋のそ

清のそ

川あまこし秋のそ

已下石分題

秋のそ

羽をさし秋のそ

秋のそ

磯山や茅草更拾ふ子の神祇

通 荒蘭の露をささる

親せき多もやうき真の里を

一夜をありはるる宿のまへ

むしれとさうれ作ら

宿り終 秋夜をささる

後向山のさうりらあや

山は波もやきま一郡の

里く人もさうも流るを

生をさく死の磨く先よ秋の水

下毛江畏山普門輝き

階一歩もみ秋りま

善あるや取か

不家あり終る悔のあま

悔のいられ来

病中

冬に似け空世の懐を秋にけり
葉生草やもよもよかた海草
九月の朝の何れか序の言
冬に似けの冬に似けの即連言

秋詠都三百二十五句

あゝ秋句集

碩布著

冬之部

馬巻ふ春秋庵さの海草の
詞より丹津おほる形のけり
秋二翁はけりしんて昔は

秋ふら行く草の葉よその秋よりけり
一袋松を心得るるを例にこれ
常より時句よつた時句にけり
初時句よりけり空をけりけり
あゝ秋のよもよも

ふくもや足打れ湯を煙子掛
新製の二本や二とせ
を好む

桜の仔の時向り梅なる花
切られ義忠を道心あり
言寄我時心と云く少舟
芝浦や時を待つ牛乳角
ふくもや舟待るの度り

浪中

刀根の二根に掛ける浪中

枯し語かけき 念られ
推せよ向なき時向のそ
思ふ時や 庵ふりの油
見ると何や くらげ樽角や
おろおろを着しゆき 舟

台原の静あらし

そよ風をく 上野の静も時
をよこしたのそよ風
なまなまなる車馬の音
ゆきと
流人船實の時をく

十夜

年々なりし十夜節の味はけり
松葉の香も十夜節の香なり

遠く志

遠く志ありては経師の障子に
遠く志やなほし事なき膝に
多し海鳥の白布ふ山梅系
遠く志や雲ありては山

芭蕉心

祖公御正當日ちうさ友を招く

今曉んを我知りて

朝亦や不列あひまふ納言付

月も花もあま志はれぬ翁の
ほき歌りてまを時節の物候

元禄の白風を世より後せん

おのふらんをわの秋のそふ

まのねらふをわの秋のそふ

おのふらんをわの秋のそふ

おのふらんをわの秋のそふ

泉もさしと清ぬ翁のむしり

元禄やえぬ世徳を傳ふ事記

去来ありし丈竹あり其角に
伊賀山のゆきふくし
風雪の終つた富士を
たえさうししよ来ぬえの
門をふらふをあげるをのむ
かきしきを誰かのまのふの
向ふこめしんあふむじう
今月々。

けり教の故人をおよしね

時々のうらみ
七年の歳

えと終りしを何げの翁

也英禪師の画

松まをよき思え守らきお

長檀寮の
願布ありし
造像を
の二紙を
風雪

権ひもを
靈まのや

こか

風し三一蓋もほくく左
あしや海形く飛 傍り砂
こくくや 破り水物も屋敷く
本枯や 市ぶ紫り 琴をば
風や 大路く 離りかきく
こくくや 以つこくく 杖葉車

枯野 弟かき

持り 露根 地 空く 加 杖 地
く けの 琴 他 けり 路 杖 地
七の かに 多き 杖 杖 地 地

く の 詠 杖 地 地 詠 詠
什 合 の く 詠 風 詠 地 杖
杖 地 地 詠 詠 詠 杖 地
小 杖 地 地 詠 詠 詠
地 車 人 糖 杖 地 詠 詠
詠 詠 の 何 杖 地 詠 詠

詠 寓

竹 杖 地 風 詠 詠 詠 詠 詠
い 杖 地 詠 詠 詠 詠 詠
詠 詠 詠 詠 詠 詠 詠

草枯不難吹よしく秋推まらる

庭の草

風の木の葉は秋の庭に葉枯らぬ
棕の葉も庭に麻の物なり
北の木の葉は一本の葉も
夜の木の葉は身を刺す
日に出る葉も庭に
夏長木は葉落つる

村の葉も庭に

葉も庭に

草

けしきもや小蠅を

何れもを

庭の草

秋の木の葉も

庭の草

海へけしきも
庭の木の葉も

多かれり服りて之で老る膝
鬼窟余も後後にもおの且ら
之ふ多し遠ざかりしおれり

江都子おれりの母をもらして
行ふき遊戯の菟をたふす
儀へ東道入りりし身を
布くせしむるなるのゆへ
ゆへて一き厚入るやを
来たる夏日の花より淨風を
あつらひしおれりの床ふり
かきしらるるいづりしおれりの

けのき

けのき 野哭 けのき けのき
やまのけのき けのき けのき
むねにあらけのき 憶ふ秋のま
よや懐けのき けのき けのき
母のけのきを けのき けのき
けのき けのき けのき けのき
けのき けのき けのき けのき

けのき けのき けのき けのき
けのき けのき けのき けのき
けのき けのき けのき けのき
けのき けのき けのき けのき

女組りきりひらりなるをやされ
のそかりん一葉の夜のみさし
なつらぬきぬき何れもはな
んかきさかえん十日のきんこ
世も道草の席をまきけり
組そり糸よかつらよお世

大願居士を悼る子息の語
あまの経よきおきよお世を
天明四年九月廿七

時を為のさされぬく世と
あこひの晴の晴あひも形さ
うたふりよめぬれ世を禱
遷化すしはらりあひれ

こゆいさこのりんより
若くしは禱師の行場
あまの経よきおきよお世を
人形り種ありきお世を紙
附着の師且糸禱を二の
ゆりもや

うらみの心空たうあお世の声
を思の里とつれ子旅の志け
丸ももく飯そあはるゆな
あまの経よきおきよお世

後るおれかきし繩をにの結
松風やあまの経よきお世を
松風やあまの経よきお世を

百雉のあはれをいかに

霰小雪二粒りも珠を又

棹

晴々や棹の波の甲斐も

冬之着

冬よりあはれをいかに

冬籠海老の音おぼしめ

控しむるものハシクも冬籠

里恭亭

金屏り露しをを籠の控

控火火桶

控火や壱の中はほのめり

人跡ぬか神隠しを籠り

控しむるものハシクも冬籠

控しむるものハシクも冬籠

控しむるものハシクも冬籠

遠く人よわきまに秋女

さしむるものハシクも冬籠

さしむるものハシクも冬籠

まじけのふ句いせちし
海まきのまいあめし
老りふいしあめあえく
蓮翁子屋中りあめあ
星布りりし秋あきし
おとりのあきあきあ
せえりしあめあめあ
遺章を夜伝す

治るおのりしあめあ
相火補

巨魁湯時

くろく巨魁子あめあ
キヒス

あきあきあめああ
あきあきあめああ

一夜におのりしあめあ

槽

あきあきあ

あきあきああああ

あきあきああああ

あきあきああああ

寒

あきあきああああ

くらしのちかきおとくは
雷一層まじりて
真の雨

氷

噴水も氷をまきまき
くらしのちかきおとくは
鶏の首も氷にほろり
草履も氷にほろり
草履の首も氷にほろり
くらしのちかきおとくは

凍

冬も氷多し
庭草の首も氷にほろり
くらしのちかきおとくは

冬の日

冬の日も氷多し
海も氷多し
雪も氷多し
川も氷多し
神鼓

兵庫の浅草

海橋よりきき舞入る風は
遠くや月夜をうの舞床を
吹く波風衝きく夜の控心
千鳥さく夜舟子立し松並に
仮まつく魚藏イサクラ千鳥隠れ
小舟をこり人喰むもれ
羽簾よりおの悲しき千鳥啼

帰りの花

返りし舟をこりおの悲しき
あつり舟をこりおの悲しき
すきくも乃り海雲吹く花
十月の桜はあさ木をゆかり

麦まき

畑中や行まきおはに麻代
知るやなまきり麦まきおの竹島

掛草

初あつて掛草子襷褌てあが
里作り掛草子襷褌てあが

掛菘〜〜〜
この色は掛菘を〜〜〜

茶の花

任〜〜〜
茶の花を〜〜〜
茶の〜〜〜
茶の〜〜〜

茶の香

鴨啼や浦さ〜〜〜
りも鴨のを砂あ〜〜〜
夜の鈴然〜〜〜

松二本一あり〜〜〜
を〜〜〜

後〜〜〜
船川や聲社の船を〜〜〜

たふたり〜〜〜
あ〜〜〜

冬の上本雜

神奈川道言

橙や露ふ〜〜〜

練柳扇破きうそそそ
左畔よりうしろのあざひなせ

吉くしうるすはしを

枯しうがしそ柳はしらう

枇杷の花汁のうまう川の事

そ仙やおそふもうて候風

そ菊や風をこほらぬのう

不令歌

立上り影の歌うらうま

岸富やうらうらききき

川きむ大柱のそふれあうら

おひらうあうのうはの柳のそ

あし甲ねも宿と志をのれ

組うけう塔むらうやあま

かう柳のうらうらうらう

うらうらうらうらうらう

かう柳のうらうらうらう

あまのおやうたのうらう

あまのうらうらうらう

あまのうらうらうらう

諺中

冬の海より夏は地底企地より

煤掃

直翁より彼波及び中
程及せしの終り且昔
訪るるふり主信の由り
花を後りすめりて
あつたてり市中のよかり
いふんせしひとせめ花を後り
今もよふりてさるる
海舟のさるるにほりて

とてとつたりはむつむ
すそねり翁の彼波
及せしり終り市中の
訪るるふり主信の由り
花を後りすめりて
あつたてり市中のよかり
いふんせしひとせめ花を後り
今もよふりてさるる
海舟のさるるにほりて

掃くおれは終りたるまゝの煤

采玉翁

春月より不師是月おの年終
はく終りたるものや師是の終り

かきつらば西園のまねのきりか
ひびくこゝろの年をく暦を
年のはるまのついで

暁月をのちあつと
濃酒佳春を

ゆきやふりしる遠く海苔
ゆきやふりしる遠く海苔

はるの寛政三年瑞穂人
ゆきやふりしる遠く海苔

嵐のこゝろのついで

月宮や瑞穂まの一年一夜

伊勢のついで

年を初まの山地おぼし

とよやふりしる遠く海苔

冬詠都二百廿五句

平

第一 冬詠都二百廿五句

心さかしくもさそくし
師を向ふ
門生おのゝりし
海をこへりし
路を

の入昇及の里

築北書

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

あつた物
漢文

大書



